

幼少時の思い出、あれこれ



大槻虎男

奥尻島の自然

私は満六才から小学校を終えるまで、北海道の僻地に住んだ。生活環境は自然が豊かで、子供たちの遊び場も大地——野、山、川、海——そのものであった。

明治四十一年の暮、住みなれた宮城県を後に旅に出た私たち一家は、函館に着いて、そこで貨客船東運丸(二〇〇トン)に乗り、二日がかりで途中江差港に寄港して日本海洋上の離島奥尻(面積一五〇キロ平方)についた。折柄のあらしで小さな船体は木の葉のように揺れた。大波に持ち上げられて、次に落下するときは奈落に沈む思いであった。

父はこゝに村医として招かれた。高台の病院からは港が一望の下に見渡され、海岸線と出入する船舶、漁舟はパノラマ

のように広がり、快晴の日には江差、瀬棚の山々が海の彼方に見えた。

当時の北海道は開拓途上にあり、通称蝦夷といわれ、奥尻島にも文化的香りは希薄であった。海岸には方々に日露戦争名残りの機雷の残骸が引上げられておいてあった。

島に上陸したのが十二月で厳寒期に入っていた。雪が深い、そして寒いというのが第一印象であった。冬の子供の遊びは道路スケータング。それは氷の張った池や湖はこの狭い島にはないので道路が行人に踏まれて、氷路となった上を滑るのである。スケート靴などもちろんある筈がない。歯のすり減った古い下駄の裏に反り身に削った竹片を釘で打ち付けて滑り用具とした。私も上手になって得意であった。道路にはかなり凹凸があって、足許を誤って転倒すると手をつけてよく怪我をした。

その頃の子供の服装は筒袖の和服で、通学のときは必ず小倉の袴をはいて、庇しのついた制帽を冠った。しかし漁師の子供にはひどい服装もかなりあった。洋服は駐

在所の巡察と学校の男の先生に限られ、珍らしかった。

北辺の冬は長い。家の中に閉じこもる日が多い。春の訪れが待遠しかった。

四月に入って、雪が山かげに少しばかりの白い雪斑として残る頃、子供たちは待構えたように、外に出て行く、その一つとして記憶に残るのは山うど探してある。

山麓の林の中に昨秋の枯葉が敷きつめてその上を歩くとカサカサと音を立てる。多年生の植物の芽が伸びて、枯葉の下にかくれている。勘を働かせ、見当をつけて、せいぜい一〇センチ足らずのうどの若芽を掘り出す。見付かると歓声をあげる。半日かかって十本足らずの収穫を家に持ち帰る。夕食の汁に入る。父の好物で、ほめてくれた。

海の幸も、冬の終る頃に始まる。

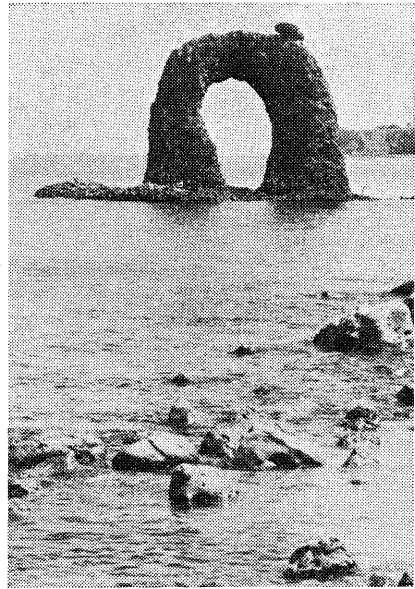
わかめは水際に氷が残っている寒い時のが柔かで、一番おいしい。干潮を見計って、岩の上にしゃがんで、海中に手を伸して引張り上げる。うみそうめん、ふのりなどの海藻類は冬から春までが生育季で夏になると枯れ

て行く。のどかな春の日、岩の上から海中を覗くと、褐藻を主とし、緑藻、紅藻がその間に点綴して、色どりがまことに美しい。磯釣りも春に始まる。

「いい漁師になるナア」と病院にとれた許りの魚を届けに来た漁師が真黒に陽に焼けた私を指して、母に云った。子供心に釣上手を賞められたと思って得意であった。私は磯釣りが好きで、就学の前からよく海岸に釣りに行った。ニシキベラ、フグはよくかかったが食用にならない。ウグイ、タナゴ、アブラコは食膳に上った。

北海道には竹が自生しない。竹竿は貴重品である。山に行つて、真直な木の枝を切つて来てこれに代えた。釣針とてぐすは消耗がはげしく、よく村に一軒きりない早瀬雑貨店に行つた。通帳で買うので何を買つたか親に知れる。ハラハラしたが父は釣り道具には寛大であった。おもちゃとか菓子など友だちが持っているの欲しくなつたが厳禁されていた。

やがて夏になると泳ぎが始まる。見よう見まねでいつものまにか泳ぐことを知つた。いぬかきの自己流である。



奥尻島の奇勝 鍋釣岩

六月一日から子供の水泳が許された。砂浜は魚船の発着でよごれているので岩場の方が主な遊び場であった。

漁師の子供は多く、生れたまゝの丸裸であった。僕自身は越中をつけていた。水に入る前に耳に唾をつけた。海底の岩壁に多数のバフンウニがギッシリはまり込んでいる。潜水してこれを探り、石で殻を割って、黄色の卵巣を他の内臓から分けて取る。手の平に載せて海水で一瞬洗つて口に入れる。その味こそ天下一品である。六月にアワビが解禁になる。これは数が少く探し出すのに苦

劣する。殻に石灰藻がついて、岩と区別しにくい。見付けても迂濶に手をつけてはならない。危険を感じると岩にしがみついて、離れなくなるからである。殻がたたき割られても離れない。ソツと近よって、ナイフを岩と殻の間にさし込み、間髪を入れない早業で引離すのである。失敗したら岩を砕いて持帰ることもある位高価な海産物である。その頃私も一日に一個か二個探し出すのがやっとで、ナイフで殻から離して、その場で食べた。味といふ、歯ざわりの感触といい、えもいわれぬものであった。釣り、アワビ取りが一ヶ所で旨く行かぬと、漁場を変える。つい遠くまで行って、夕方になりあわてゝ家路につくこともあった。鍋釣岩という奇勝があり、奥尻島のシンボルとされるが、この附近の海岸も私共の漁場の一つであった。

「潮かおる北の浜辺の砂山のかのハマナスよ今年も咲けるや」は啄木が釧路の海岸で詠んだ歌だが、奥尻の海岸の平地にもハマナスの大群落が発達している。その間に造られた歩道を私達は郊外の小学校に毎日通ったもの

だ。淡いが独特な芳香があたり一面に漂った。バラに似た一種の低木、茎葉に刺がある。直茎二―三センチのピシク五弁の花をつける。花が散ると下位子房が膨れて果実となる。先端に五ヶの萼片が残留する、この果皮だけを取り出して食べる。甘っぱい味はとくに美味というのではないが友達の真似をして食べたものである。

家庭生活

夏休みに入ると、東京に遊学の兄や姉が帰省して、わが家は俄かに活気を呈した。東京から奥尻に二―三日を要し、その上旅費が多額に上った。父は年に一度夏季休暇だけはこれを工面をして、子供たちを全部親許に呼び寄せて短期間ながら年に一度の家族一同の生活を共にした。

父は安政六年に生れ、学問好きで、神童といわれ、漢学塾から蘭学を修し、西洋医学を学んだ、儒教的教養を子供にも求め、頑固一徹は接する人を恐れしめた。長兄が小学校の上級のとき、作文に甲の上の評点をつけられ



両親と8人の子供が夏休みに奥尻島に集まった。長女は嫁して不在。両親の間に立つのが筆者（6歳）。明治42年。

たので、喜び勇んで家に持ち帰り父に見せた所、いきなり「馬鹿」といわれ頬に平手打を食った、たゞ一字朱筆で直されてあった。

子供等は大きくなっても年に一度、父の厳格な教育を受けたわけだが、それよりも子供たちは辺境の僻地に苦闘する両親の生活を見て、強烈な印象を受けて帰った方が真の教育であったのかもしれない。

長兄は東大医学部、次兄は東京の中学、三兄は郷里白石の中学、長女は日本女子大英文を出て他家に嫁し、二女は東京の保母養成所にそれぞれ在籍した。小さい方の男子二人と女子一人が奥尻の小学校に学び、末妹は学齢前であった。長女を除く八人の子供と両親が一個所に集まったわけである。

父は午前は外来、午后は往診、帰宅すると薬剤を調査して、患家から来た使いに渡す。

父が往診に手間取って、帰宅がおくれると、子供等は空き腹をかかえて、父の足音を今か今かと待った。足音を聞きつけた一人が「お帰り」と叫ぶと家族全員が玄関

の前の畳の上に正座し、頭を下げて父を迎えた。

どんなにおそくなっても父が着座しないと食事が始まらない。父が一番目に箸をとる。盛り合せも父が取る前に食べるわけにはいかない。座る席順も父が上座で、男子、女子、そして年の順ときまっていた。木製の円い飯櫃は母の傍にあって、お代りの声に、母はろくに食事ができなかったと思う。

男尊女卑で、僕は得をしたことが多い。二才違いの姉とはよく喧嘩をした。悪口の言い合いでは到底姉の敵ではなかったが腕力を行使して姉を泣かせた。父に叱られるのはいつも姉の方であった。年上なのにとというのが父の論理であった。

夜の団欒は楽しかった。父は疲れて帰るので肩の凝りを訴えた。夏休みには食後に父が腹這いになって、子供たちがその周りにムカデの足のように並んで、按摩をして上げた。次女が東京で按摩を習得して来て、主役を受け持った。年少組は力のいらぬ頭部と足部であった。手を動かし乍ら、世間話しを、学校の噂などをなごやかに

話し合った。年下が兄や姉にお話をねだった。ジャンバルジャン、クオーバジス、フランダーズの犬、刀工正宗、宮本武蔵など面白かった。直ぐ上の姉はゾーデルマンの憂愁夫人もこのとき梗概をかきかされたと述懐している。母は夜食の用意をした。私は暫くして睡くなった、兄は毎晩私を抱きかかえて、寝所まで運ばなければならなかった。

母は夏休中、一家の食事の用意だけでも大変であったがその他に、子供たちの持ち帰った衣類の洗濯と繕いに忙殺された。衣類は新調は希で大部分順おくりで年下にまわった。上の兄の着物はほどこいて、洗濯し、張板に張って乾かし、次の男子の着物に縫い直した。紺こいぬ飛白ひびくは何度洗っても丈夫で色も褪せない。男子は五人であるから五男の私よりも古いお下りの着物を着たわけである。

母はこの時、翌年帰省するまでの一年間の衣類を用意して持たしてやらなければならなかった。一年分の靴下の繕いだけでも大した仕事であった。これを膝の上にし

て、針を手にして疲れて居眠りする、暗い石油ランプの光に照らされている母の姿を今も想い起す。在京の学生は洋服に靴をはいた。母の修理した靴下の底は一見雑巾の感じであった。兄が東京に帰ったとき、ある人がその古い靴下を見てどこの店で売っているのかと嘆声を発したという。

父は処生術の拙劣な男であった。蝦夷落ちしたのもそのためだが奥尻では再びその轍をふんだ。三年目やっと慣れた土地を離れて更に辺鄙な土地に移る羽目に陥った。大平洋に面した庶野村で、襟裳岬に近かった。アイヌが沢山住む百戸足らずの家屋に海岸に散在する原始的な村落であった。両親と共に、住居、食物、自然環境すべてにおいて局限に近い最低の生活に堪えねばならなかった。

三番目の兄正男が後年次のように述懐している。

「私も兄弟は誰れ一人すぐれた頭脳の所有者でなかった。たゞ自慢し得ることは誰れ一人酒はもちろん、煙草も吞まず、一筋に努力家であり勉強家であったことであ

ると思う。しかしその努力の原動力は競争意識や自己の栄達意識から出たものでなくて、ひたすらに苦勞する父母をよるこばせようとする一心から滾々として湧出したものであった」

(婦人之友 昭和十八年十一月号)

〔著書紹介〕 明治三十五年十一月一日生れ。昭和四十二年三月まで、お茶の水女子大学生物学科植物学の教授。

著書に『聖書の植物』教文館等があります。昨年(昭和四十二年)の十月号掲載の、大学校内の植物をめぐる座談会に御出席をいただきました。